

川崎信用金庫理事長賞受賞作品

「ぼくが大人になったら」

鷺沼小学校 5年生 石内 健晴

五年前の秋の夕方の事だった。

突然、地鳴りのような爆音をひびかせて、ぼくの頭の上をヘリコプターが通りすぎた。白い機体に赤いストライプ。初めて見るドクターヘリだった。近所で農作業をしていた女性がこううん機に足をまきこまれたらしい。ひん死の女性を救うためにドクターヘリが飛んできたのだ。なんてカッコいいんだろう！ぼくのゆめが決まったしゅん間だった。

ぼくは、大人になったらフライトドクターになって多くの人を助けたい。

その年のクリスマス、サンタクロースから「救命救急フライトドクター」という本をもらった。日本医科大学千葉北総病院の救命救急センターについて書かれたノンフィクションの本だった。北総病院では、救急隊の要請からわずか三分でフライトドクターを乗せたドクターヘリが空に飛び立つ。ドクターヘリは、現場まで時速二百キロのスピードで飛び、着陸後、すぐに治りようを開始する。今まで助からなかった重症者の命が救われる様子にぼくは心を動かされた。そこで両親にたのんで、千葉県印西市にある千葉北総病院に連れてってもらい、ドクターヘリをこの目で見ることにした。ドラマ「コードブルー」のさつえいにも使われているヘリポートだ。あこがれの場所に来ることができて、むねがドキドキした。たまたま通りかかった機長さんに、ここに来た理由を話したら、ヘリコプターのドクター席にぼくを座らせてくれた。ぼくは、言葉にならないほど感動した。救急医になるためには医学部に行かなくてはならない。ぼくはじゅくに通って勉強をがんばることにした。

そんな冬のある日、川崎市立井田病院で手術体験セミナーに参加させてもらうことになった。このセミナーのすごいところは、本物の医りよう器具をぼくたち子どもに使わせてくれるところだ。電気メスでぶた肉を切開したり、エコーでお腹の中を見せてもらったりするのはとてもき重な経験だ。一番印象に残ったのはほう合の練習だ。外科医が使う針は、釣り針のように曲がっていて、一本一本に番号がふつてある。番号があるのは医りようミスを防ぐためだと知って、ぼくは、「なるほど！」と思った。外科の先生のお手本を見ていたら「これならぼくにもできそう」と思ったけれど、実際にやってみると、とてもむずかしかった。ぼくは本当の医師になった気分でドキドキした。

眼鏡をかけて口ひげを生やした院長先生がぼくに話しかけてくれた。

「しょう来、何科になりたい？」

ぼくはとてもきんちょうしたけれど、

「救急科です。」

と答えた。すると院長先生は、

「そうか。夢に向かってがんばってね。」

と言ってくださった。院長先生は、とても気さくでおだやかな感じがした。ぼくは、応援してもらったような気がしてうれしかった。

突然の大けがや急病で生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされた患者さんはどんな気持ちだろう。患者さんの家族はどんなにショックだろう。きっと、患者さんもその家族もぼくには想像もつかないほど不安だと思う。ぼくは、病気やけがを治りようするだけではなくて、患者さんとその家族への思いやりや優しさ、気配りを大切にする医師になりたい。そして、ぼくは、どんな状況でも決してあきらめず、患者さんのために最善を尽くす医師になりたい。

五年前、ドクターヘリで運ばれた女性は、命もあやぶまれるほどの大けがから回復し、歩けるようになったそう。もしもドクターヘリで運ばれていなかったら、このような回復は望めなかったかもしれない。ぼくは、この話を聞いて、この女性のために、どれだけ多くの人が力を尽くしたのだろうと思った。きっと、救助隊や救急隊、医師、看護師、技師など、救命のプロたちのチームワークがあったにちがいない。

ぼくも、大人になったら、このチームの一員として川崎のために働きたい。